百人町教会証詞 2026 年 11 月 8 日

「恐れることなく自立する共同体へ」マルコによる福音書 6 章 30－52 節

自分に洗礼を授けてくれた「師」ともいうべきヨハネが惨い殺された方をしたのを、イエスも当然知っていた。すでにイエスは弟子たちを方々へ遣わして、宣教活動を始めていたが、ヨハネの処刑の知らせは、衝撃的であったに違いない。ただし、マルコ伝はヨハネの処刑について挿話的に扱っている。けれども、この出来事とイエスの宣教活動は、当然関連するし、かつ前者は後者に影響を及ぼしていると思われる。

30 節では宣教活動からいったん戻った弟子たちに、イエスは休息をとるよう促す。ただし、その場所がやや不思議に思える場所である。イエスは「人里離れたところ」に行って休めと言うのである。「人里離れたところ」とはどこなのか？聖書協会共同訳は「寂しいところ」としている。ギリシア語辞典では荒地あるいは砂漠という意味もでる。要するに何にもとらわれない場所、裸にされた場所、自由な場所、誰もいない寂しい場所、となる。これはどういうことか？

弟子たちはすでに家を出てしまった。もちろんイエスもそうである。彼らには帰る場所がない。休む場所は、人里にはない、ということだろう。イエスの集団は、放浪しているかのようだ。しかし、一方で彼らは町や村を歩きまわり、彼らのもとに多くの人々が集まって来た。そして宣教の多忙さのため、食事をとる暇もないともいわれる。「人里離れたところ」と、ごった返しているかのような場所との対比が示されている。それにしても、弟子たちも含め、食事もできないほど忙しいとはどういうことなのか。おそらく、イエスのカリスマ的能力による病気直しや呪術的な技法、それをまねた弟子たちの治療行為や祈祷などが信用され、相当な数の民衆がやってきたのであろう。それゆえの多忙さだろう。そのため、イエスはこのような場所から離れ、人里離れたところへ行くよう促したが、その場所とはどこなのか。

一同は船に乗って出かけたとあるから、ガリラヤ湖沿いをまわって人のいない岸辺に向かったのか、さらにそこからさらに内陸に入ったのか、よくわからない。イエス集団は、あるいは、荒れ野の隠遁集団であるエッセネ派のように洞窟を根城としていたのかもしれない。彼らもどこかで寝起きし、身支度せねばならない。各家に滞在し、宣教活動し、そこに厄介になって、身づくろいしたかもしれないが、やはり、かつて洗礼者ヨハネが荒れ野で暮らしていたように、イエス集団もそうした拠点を持っていたのかもしれない。

しかし、このイエス集団の行動を察知した民衆はそのようなイエス集団の遁走（と見えたかも）を許さない。それどころか彼らの後を追い、否、先回りさえして、イエスたちが行くだろう岸辺に到達してしまった。この事態を文字通りに読むなら、ただごとでないほどの人々がイエスを信じ、頼っていたということだ。

イエスは船から上がり、この群衆を見た。そして

飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。

マルコはイエスの思いをこのように書いた。「深く憐れみ」とは腹の底から同情するというような意味で、内臓という語からつくられている。ただし、ギリシア語で。イエスはアラム語で思い考えたとすれば、ラーハムだろうか。いずれにせよ、イエスの思いとは民衆の姿が実にみじめで、かつ寄る辺ない姿であることに心底同情したか、あるいはそれ以上に、この姿を放置する「この世」を恨んだのかもしれない。それをマルコはこの動詞で表現したのだろう、もちろんイエスになり替わって。そして、本来なら弟子たちと共に休息の時をとるはずだったのに、彼は再び教え始めたのである。教え始めたとあるから、治癒行為や呪術的行為ではなく、ユダヤ教の教師として、神の言葉、すなわち律法を教えたのだろ

う。

やがて時がたち、夕方になったのか、弟子たちはそろそろ解散させようと提案する。この場所は「人里離れたところ」だから、食料も調達できない。だから町や村へ戻らせるべきだというのだ。そして自分たちで食料も調達させるのがよい、とまで弟子たちは言った。

これに対してイエスは、弟子たちが調達するよう命じた。弟子たちは当惑する。こんなに大勢の人々にどうやって食料を調達できるのか、できるはずがない、という。ここからは奇跡物語となるが、今ある5つのパンと2匹の魚を分けよ、というのである。その際、群衆を組に分けて座らせた。そしてイエスは祈りを唱え、これらを分け始めたという。すると5千人の男たちは満足したというのである。マルコ伝では実はこのパンと魚の分配の話はそれほど奇跡的に描いていない。5千人は大げさだと思われるが、ともかくもこの少ない食料を祈って分けたというだけである。実はマタイ伝もルカ伝もそうである。これは奇跡ではないのである。要するにイエスはこの少ない食料を膨大な数の人々にひたすら分けたに過ぎない。しかも、そのパンくずは12籠にもなったというのだ。当然である。イエスはパンを粉々にして配ったのだろう。一人分はおそらくツメの垢ほどだったのだろう。しかし、その驚くべき執拗さでパンを分けようとするイエスの姿を見ているから、民衆はごくわずかなパンの屑でさえ、満たされたのである。つまり、民衆をこの場所から追い出すのではなく、今ここで、彼らと共に生きる道を選んだのである。そして食料はわずかであっても、それを分け合うことで、人々の魂は満足したのである。そして一時の空腹も満たされたに違いない。

このイエスによる分かち合いの行動は、行動であると同時に、神の「言葉」でもある。行為は言葉となる。その言葉は、ともに生きることが最善であるということと、もう一つは、この世の価値に支配されている場所から離れて、自分たちの自由と主体性を獲得せよという二つであろう。こうしてイエスと弟子たちは、この人里離れた場所で、ともに生きる共同体の原型を形成したのである。ただし、ここでは5千人の男とだけあり、女性や子供に言及しない。これは普通に考えれば、男が主体の古代世界だからとなるが、実際はどうであったかと言えば、もちろん女も子どももいただろう。それでも、男の数だけを書いたのは、著者マルコにおいては家父長制が全く疑われていないということだ。

さて、その後どうしたか？不思議にも、この給食の話は唐突に終わり、再びイエスは弟子たちを船に乗せ向こう岸に行かせた。彼らを休ませるためだろう。しかし、今度はイエスは船に乗らず、群衆を解散させると、山に登ったという。夕方になるとイエスは岸に戻るが弟子たちは船で沖に出ている。しかし逆風でなかなか進まず、夜を海上で過ごす羽目になった。イエスはその湖面を歩くという奇跡的な行動を起こす。そして弟子たちに近づき、「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と言った。イエスが船に乗ると風は静まった、と言う。そしてマタイはこう書いた。

51 イエスが舟に乗り込まれると、風は静まり、弟子たちは心の中で非常に驚いた。 52 パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである。

弟子たちは非常に驚いたという。それはそうだろう、いきなりイエスが湖上に現れ、乗ってきたのである。これは奇跡物語だが、イエスが実際には神と同じ権威を持つことの主張である。しかし、本来の目的はイエスの権威の主張ではない、と思う。

この物語は、新しい共同体の形成するにあたって、一切の恐れや不安をカッコに入れてしまえと言っているのである。船出は怖い。将来は不透明だ。しかし、今の苦難や倦怠、諦めを突破するには、人里を離れ、時に水の上を行き、自由になる。もちろん、それは一人では不可能だ。集まった人々がそれなりに力を合わせなくてはならない。人の資質も能力も様々だが、この世の苦難を乗り越えるには、この世と違う倫理を立てなくてはならない。それは分け合うことである。そして抑圧や迫害、とどのつまり

は「死」を恐れないということだ。

イエスは自立と自由、分け合うことが大事だと言い続けるが、問題はそれを実行する決断の手前にある「恐れ」である。恐れは諦めを生む、恐れは無知であるよう促す、恐れは他者を貶め、かつ他者を羨望させる。こうして今ある自分にとどまらせてしまう。これに対してイエスは、つまりはイスラエルの神は、常にそこからの脱出、解放を促すのである。この 5 千人の給食の物語と、湖上のイエスと弟子のエピソードは、つながっている。それは 52 節でマルコが書いているように、弟子たちが「パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである」と解説している通り、孤独と自由、すなわち人里離れたところ、あるいは逆風の海の上を進むこと、を恐れたことを皮肉ったのである。民衆は恐れず、ついていった、少ない食料を、ほとんど屑のようなパンと魚で満腹したということ、すなわち恐れを乗り越えたということを、残念ながらまだ弟子たちは納得できなかったのだ。湖上の風を恐れ、イエスの姿を恐れ、先に進めないのであった。このような姿を「心が鈍い」とマルコは言い表したのである。

さて、私たちは今、イエスの時代がはるか先の時代に生きている。そしてこの 200 年は地上のエネルギーだけでなく、地下に数億年眠っていた膨大なエネルギーを使って、はるかに豊かな人生を生きているかのようだ。それなのに、世界は途方もなく貧しくなっている。世界そのもの、地球そのものも、そうした浪費的消費によって、異常をきたしているともいわれる。もちろん、この近代の歴史過程は長いスパンで見れば大いなる発展であり、飢饉や伝染病は克服され、普遍的な人権尊重の理想も広がっている。デモクラシーも広がった。それにもかかわらず、多くの人々が戦争や貧困によって苦しんでいる。他方、一握りの人間たちが巨万の富を蓄積し、世界規模で差別と分断が広がってしまった。世界帝国と言うべきアメリカが極端な保身と身勝手な主張によって、世界に混乱を呼び込み、ごく一部の「私たち」がすべてを支配する、つまりファシズムが善いと言っている。一昨日、トランプ大統領率いる共和党が中間選挙で大きく負けたが、この先がどうなるかは予断を許さない。あと 2 年はトランプさんが大統領なのだ。イスラエルの総選挙も終わったが、どんな連立ができるか今のところ分からない。我が国は連日の情報漏洩に手をこまねいている。今後、インフラが壊される恐れさえある。ＡＩとインターネット社会の劇的な発達は、それをつくり用いる人間そのものを劣化させている（例えばＧＭＯの社長の会見）。

加速する社会と言われるが、もはや何のための加速なのかが見失われている。ひたすら、乗り遅れまいと最新のシステムに便乗するしかない。一方で、膨大な人間たちが、置き忘れられてしまった。貧しさは先鋭化し、やがて暴動がおこるだろう。現にフランスでは起こっている。

しかし、人間としての本来の在り方はどうなのだろう。一人の人間の命の進み具合が大きく変わったのだろうか。人生 100 年と言われるが、それは古代からそうだった。旧約聖書では 120 年とされていた。もちろん、今は平均寿命が問題とされているのだから、古代とは大きな開きがある。もちろん、客観的な数値で体の状態が示され、その指標に基づいて、マニュアル通りに生きるのでひとまず十分というなら、もはやいうべきことはない。しかし、そのような疑似的平安の陰で、何かが大きく壊れ、失われていく。一つには、人間の心そのものである。ほとんどすべての人間が薄く小さな箱を世界と勘違いし、リアルとバーチャルが反転する。お金もデジタル化し、現金を間もなく見なくなるだろう。背後ですべてがデジタル情報として交換され、私たち一人一人が、恐ろしいことに、影になる。リアルな自分はスマホのサーバーに移行されるからだ。だから、見えているお互いの姿は影なのだ。

もちろん、これは極端な見方だが、身体の接触を嫌い（もちろん満員電車は論外だが）、臭いを嫌い、紫外線を嫌い、ひたすら自己を防御する時代になり、だんだん自分からゲットーにこもるようになりつつある。

これは分断ではなく、退行であり、繭へと戻ることである。分断なら対立も起こりうるが、自己を閉じていくなら、それさえ起らない。そのような事態の到来の原因は何か。それはやはり自由への恐れ、自立への恐れだろう。そして恐れを引き起こす力のもとは、人間の作ったこの世界の仕組みそのものだ。

しかし、イエスは、そしてイエスに先立つ古代イスラエルの預言者たち、知者たちは、この世界の仕組みそれ自体を、時には破る、時には耐える、あるいは待つ、さらによき未来を展望する、そして可能な限り退却、退行しないことを促し続けたのであった。それは言い換えれば、世界を恐れない、自立を恐れない、そして互いに分けあい、相互に自立する共同体をつくるということだ。そのためには、ひとまずであるが、やはり人里離れた場所に行くことが必要だろう。それはもちろん、この世界の創造者と出会い、彼を恐れることを想起すると同時に、この世界への恐れを解き放つためである。キリスト教はその場所を、驚くべきことに町の真ん中に作った。もちろん、同時に町の外にも作った。そして今日もまた、私たちは、人里離れた場所に来ているのである。そこに、恐れはすでにない、と言おう。